

建築家の

往復書簡

原広司 — 磯崎新

9.....

被災地の風景は
子供や学生には
どのように映るのか

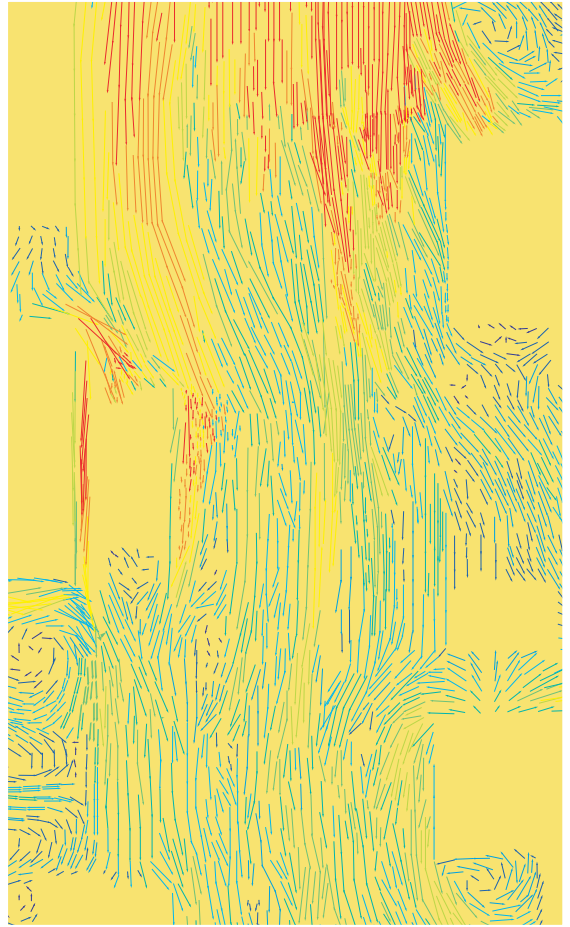
磯崎新様

HIROSHI HARA

原広司

これまでの書簡の文脈から、ややはずれる^{おそ}惧れもありますが、日付けを考えますと、3・11の地震・津波、そして原発をめぐる出来事に触れねばならないと思いますので、とは言いましてもあまり気乗りしませんが、私の思いの一端を書き留め、磯崎さんにも独自の考えを述べて頂けたら幸いです。

あまり気乗りしないとする理由は、私たちの年令にあるのではないのでしょうか。過日、多少被害を受けた宮城県図書館を訪れた際、仙台の津波の現場に、ほんの一瞬連れていってもらいました。もちろんそれまで、テレビで様子は想像していましたが、その光景は、同世代の人々の発言にもありますように、私たちが六十数年前体験した光景、つまり



E-JUST(エジプト日本科学技術大学)コンペティション案の
WIND VALLEYのsea breeze[2009]
[図版提供:アトリエ・ファイ建築研究所]

9011149991

LIXIL
Link to Good Living

株式会社 LIXIL

トステム・INAX・新日軽・サンウエーブ・東洋エクステリアは、2011年4月1日より、株式会社LIXILとしてお客さまの多様なニーズに対応した商品とサービスを提供してまいります。

私たちの出発点となった第2次世界大戦の焼け跡、あるいは強制疎開に見た様相と通じるころがあり、そのためでしょうか。津波跡地の光景は新しい世代の手にゆだねられていると感じました。

ただ、当然ではありませんが、戦争直後と今日では、状況にあまりの隔たりがあり、若い世代にとっては、厳しいものがあるでしょう。戦後そこに立たされた風景は、その後の近代化の展開はどうであったにせよ、なにはともあれ変革への予兆をはらんでおり、ほとんど全ての人々はそれを共通に受けとめたと思います。今、被災地に立つ時、子供や学生の眼には、風景はどのように映るのでしょうか。私が書き留めておきたいのは、この一点につきまます。

この出来事は、少なくとも日本にとっては、かなりまずい精神の停滞期に発生したように、私には思えてなりません。もちろん、こうした状況を招いてしまったのは私たち自身であり、今、被災地に立つ子供たち、若者たちになんら

関係なく、喚問台に立つのは私たちです。こうした手続きのもとで、地震・津波、そして原発を自らの問題として語る時、さまざまなかたちで、怒りや絶望、ジレンマにおける決断力の欠如への悔恨と怠惰に対する寛容の局面が走馬灯のようにかけぬけてゆきます。そうです。私が言いたいのは、圧倒的に強力な資本主義が展開する知的なるものの排除の状況です。

会津につくった中・高一貫教育の学校が、避難所になって、余震が続くなかで、久しぶりにテレビを一カ月間ほど見続けた。正直なところ、生きた心地がしませんでした。最初のM9.0の揺れて、キャットウォークのグレイチングが落ちて、対応する間に、原発から人々が避難してきたのです。テレビでは、原発の推移を見ていたのですが、次から次へと国立大学の教授たちがでてきて、解説をする。ところが、申し合わせたように、同じことを言うのです。微分と積分をこちゃこちゃにして、マイクロシールドとか、ベクレルと

原広司 様

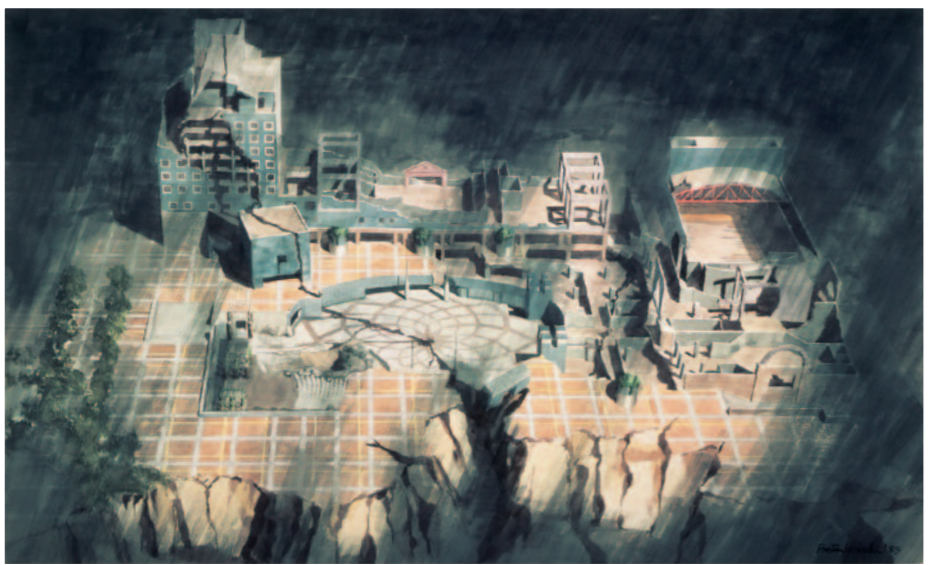
原広司数学原理主義者説の展開を考えようとしていた矢先の3・11でした。この事件(故)にであう前に、他誌(思想)二〇二年第五号、No.1045(岩波書店)に予告のようなことを書いたのが二カ月前まで来てきたので、そこに登場させた原広司さんのこと、理由だけ説明させていただきます。この記事は、ガラバゴスにみえはじめた『思想』が、建築家に何か言わせようとしたらしく、伊東豊雄と山本理顕が長い

対談をやり、これにコメントをつけろという依頼でした。建築家として出発するとき、誰もが先行するモデル/反モデルを頭に描いている。伊東さんは篠原一男、山本さんは原広司さんをそれぞれモデルにしたに違いない。ついでに反モデルは両者とも私だったようだ。一九七〇年の時点で、数学原理主義が、批判的たり得る状況があったためだ。まあこんな理由でした。無断で原さんの名前をだしたりした理由

てしまった、といった説明を一般誌(文藝春秋)二〇二年四月号)にいたりしていたら、もっとひどい事故にであってしまいました。日本列島は六十五年前にもう経験していたはず。津波のあとの木材やトタンの破片は当時は焼け瓦だったし、ヒロシマはフクシマ第一より、更なる大事故でした。新聞やTVやツイッターをみると、動転した建築家や科学者や政治家

や評論家がいろいろ言っている。一九九五年の失敗した予行演習をまたまた繰り返している。どうして、この日本列島はこんな腰抜けになってしまったのですか。

一九四五年にはもっと深く絶望していました。もっともっと悲惨でした。食糧もなかったの、「黒い雨」のかかった野菜(雑草)も食べました。私たちはまだもの心がやっつく頃



つくばセンタービル廃墟水彩[1985][図版提供:磯崎新アトリエ]

か。そのうちに、原子力発電の仕組みが解つてくると、その簡単さに驚かされました。もっと、高級な仕組みだと思つていたら、虫がよすぎるような単純さ。知の排除かポピリズムの図式。

今度の出来事で、地震・津波と原発は、はっきりと区別することが重要なのではないのでしょうか。津波に対しては、港湾・漁港、そして海岸線。これは国家管理下のカタゴリイ。この制度に異議を申し立てるつもりはないのですが、ここには重大な意味があると思われれます。原発は、十分に話題となるでしょう。

国家は金の工面に傾注し、それぞれの地域が独自のリカヴァリーと展開を図るのが原則でしょう。この原則に、学生の群れはどう動くのでしょうか。

二〇二二年五月二日
原広司

Arata Isozaki 磯崎新

をちゃんとべる必要があると思つて先回の書簡ではじめかけたことでした。

コンドラチエフ(柄谷行人)の六〇年サイクル説が一九九五年に起つていたことを予告してははずなのに、十五年おくられて発生して、いま対策を迫られている。阪神淡路大震災・東京地下鉄サリン散布・全世界電脳網・「談合は悪」、こんな兆候のすべての対策に失敗したため、列島が「うつ」にな

りました。しかし、先輩の建築家たちは、大部分が失敗だったとしても、結構ガンバッタ(いまのTVのモニター)にでている連中、何のやる気もない)と思います。二十五年で、日本列島の近代化をやり遂げたのです。数学原理主義者・原広司の思考方法が有効に作動したのは、近代化が終つた一九七〇年代以降のことだ、と先程の文章に書きました。日本列島ではあの頃近代化モデルを使い果し、地球化対応の現代化(中国的な用法)モデルも数年前には無効になりました。もう参照モデルはありません。こんな想定外でもあるヴィジョンの危機には、かつて「物狂いの沙汰」だったといわれた「建武の新政」のような無茶な制度設計(これがアーキテクトの仕事とこしはらく言ってきました)が求められる。いまは他人事のようにひたすら期待する、としかいえない状態なのです。3・11の前日に西にむかつて出発したので暗剣殺にであい、私の身体は日本列島をシミュレーションしているような状態で、入院させられたりして、戦力外通告された有様です。そこで承久の乱の定家や、島原の乱の武蔵のように『明月記』か『五輪書』を書くか、どちらも実戦には役立たない。こんな有様、次回までには「物狂いのさま」(沙汰ではない)をみせたいのですが。

二〇二二年五月二〇日
磯崎新

はらひろしー建築家(一九三六年生まれ、一九六四年、東京大学教務系大学院建築学博士課程修了。一九六九年、東京大学生産技術研究所。一九九七年、退官、同名教授。一九七〇年よりアトリエ・エッセイ建築研究所と設計共同。一九九九年より原広司アトリエ・エッセイ建築研究所所属。いそざき、あらたー建築家(一九三三年生まれ。一九六六年、東京大学教務系大学院建築学博士課程修了。一九六三年、磯崎新アトリエ設立。